

第4章 学校における食育の推進の評価

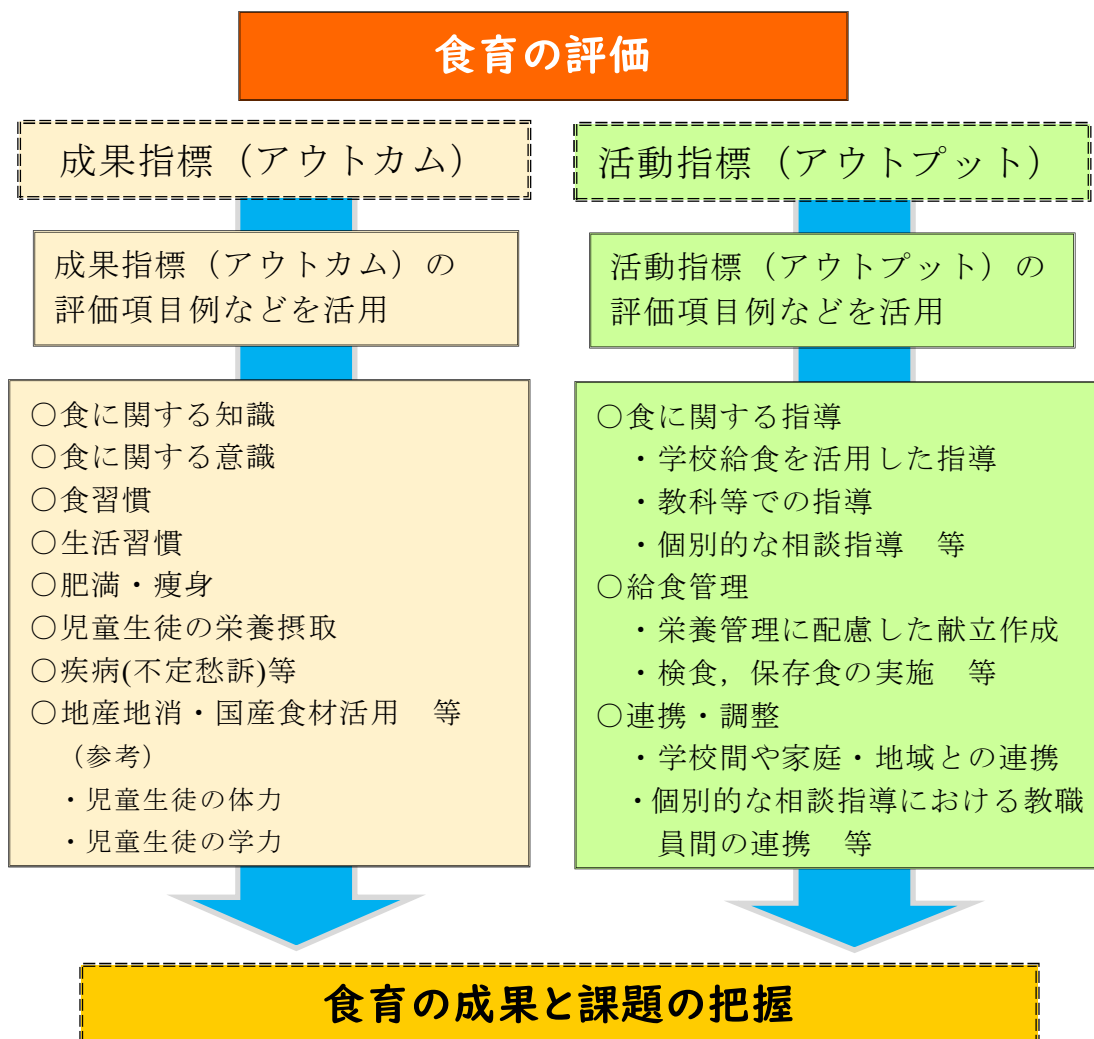
1 評価の基本的な考え方

成果指標
(アウトカム)
・
活動指標
(アウトプット)

評価には食育の推進に対しての評価と個々の食育の学習(教科等における食に関する指導)に対しての評価がある。この章では食育の推進に対する評価について解説する。

食育の推進に対する評価は、子供や子供を取り巻く環境の変化の評価と活動(実施)状況の評価とに分類できる。前者は、成果指標(アウトカム)の評価、後者は活動指標(アウトプット)の評価という。成果指標、活動指標、両方とも次の食育計画の改善に必要なが、校内、地域、社会に広く食育の推進を理解してもらうためには、成果指標(アウトカム)の評価が必要であり、中でも子供の食習慣の評価が大切である。

評価には、数値による量的な評価と数値に表すのが難しい質的な評価がある。また、成果指標(アウトカム)と活動指標(アウトプット)の両方を設定し、総合的な評価につなげる。



2 評価の実施方法

(1) 成果指標（アウトカム）の評価

成果指標（アウトカム）の評価では、全体計画の作成時に設定した評価指標の目標値を基準に取組による変化を評価する。例えば、「配膳されたものを残さず食べられた子供の割合」現状値 60%、目標値 70%、実績値 75%であれば、1（できた）と評価できる。実績値の評価基準は、あらかじめ食育関係者と話し合っておく必要がある（例 1：75%以上，2：70～75%，3：70～60%，4：60%以下）。

なお、実績値の求め方は、全体計画作成時で行った実態把握の方法と同じ方法で行う。具体的な成果指標としては、子供の肥満度などの健康診断結果の変化や血液検査の変化、生活習慣病の有病者予備群等の変化、体力向上や生活習慣の改善、意識変化などがある。これら、成果指標の評価には、子供の変化に加え、子供を取り巻く環境である学校（例：学校給食）や家庭の変化も含まれる。

《成果指標（アウトカム）の評価項目例》

各学校等の実情に合わせて、以下の指標の中から必要な項目を選択，加除修正する。又は各学校独自の指標を設定する。学校独自の指標を設定する際には、「宮城県食育推進プラン」や市町村の「食育推進計画」との関連を図りながら設定していくことも考えられる。

また，対象とする学年や様式，評価の方法についても，適宜，設定する。

成果指標（アウトカム）の例		現状値	目標値	実績値	評価	備考(取組状況や参考となる事項等)	
食に関する知識の習得状況	知識テストや授業等による知識の習得状況など	—	—	—	1 2 3 4	学校の実情に応じて段階別評価を行うか否かを検討する。	
食に関する意識の改善状況	食育に「関心がある」と回答した割合	●%	●%	●%	1 2 3 4		
食習慣の状況 (朝食摂取， 食事内容等)	「朝食をとることは大切である」と回答した割合	●%	●%	●%	1 2 3 4	計画に基づく取組の成果や課題など次年度の取組の参考になることを記載する。	
	朝食を「毎日食べる」と回答した割合	●%	●%	●%	1 2 3 4		
	「栄養バランスを考えた食事をとっている」と回答した割合	●%	●%	●%	1 2 3 4		
朝食又は夕食を家族と一緒に食べる「共食」の回数	週●回	週●回	週●回	1 2 3 4			
生活習慣の状況(睡眠時間， 排便習慣等)	睡眠時間を●時間以上確保できている割合	●%	●%	●%	1 2 3 4		
肥満・瘦身の状況	肥満度20%以上の出現率		●%	●%	●%		
	肥満度-20%以上の出現率		●%	●%	●%		
学校給食での栄養摂取状況	配膳されたものを残さず食べられた子供の割合	●%	●%	●%	1 2 3 4		
疾病(不定愁訴)等の発生状況	病欠者の人数(割合)	●%	●%	●%	1 2 3 4		
地場産物，国産食材の活用状況	地場産物・国産食材の活用割合	●%	●%	●%	1 2 3 4		
給食時の衛生管理の状況	給食前に手洗いをしている児童生徒の割合	●%	●%	●%	1 2 3 4		
学校給食関連事故の発生状況	学校給食関連事故の発生件数	0件	0件	0件	1 2 3 4		
参考	児童生徒の体力の状況	新体力テストのD・E段階の割合	●%	●%	●%	1 2 3 4	間接的ではあるが関連が想定される指標
	児童生徒の学力の状況	全国学力テストの結果が●%以上の割合	●%	●%	●%	1 2 3 4	

【評価】 1：できた 2：おおむねできた 3：あまりできなかった 4：できなかった

出典「栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育」(文部科学省：平成29年3月)

全体評価と個別的な相談指導の評価の関係

全体評価における個別的な相談指導に関する評価では、個々の評価を集団としてまとめて評価する。つまり、個別的な相談指導における個々の評価が行われていることが前提となる。例えば、「肥満度 20%以上及び-20%以上の出現率」の成果指標は、個別的な相談指導における個々の評価をもとに評価する。

例：児童数 300 人の学校において肥満度 20%以上の子供が現状値で 50 人いた場合

	I D	現状値	目標値	実績値	評価※
肥満度 20%以上	1	25%	20%以下	20%	1：できた
の子供各々の値と	2	30%	25%以下	28%	3：あまりできなかった
評価	3	21%	20%以下	19%	1：できた
	4	22%	20%以下	21%	2：おおむねできた
	・				
	・				
	・				
	50	28%	25%以下	29%	4：できなかった

全体の	肥満度 20%以上の	50 人	25 人	30 人	
値と評価	子供の合計数				
	全校児童数(300	16.7%	8.5%	10%	3：あまりできなかった
	人)に占める割合				

※学校の実情に応じて段階別評価を行うか否かを検討する。

量的な評価と質的な評価

多くの人に食育を理解してもらうためには、目に見える形での評価（すなわち、数値での評価）が必要である。しかし、子供の変化をすべて数値で表すには限界がある。子供たちの個々の発言などの質的な評価を量的な評価に加えることにより、数値での評価の限界を補うことができる。

例：食育に「関心がある」と回答した子供の割合

目標値 70% → 実績値 72% 評価 2：おおむねできた

給食ポストへの子供のコメントの数は、50 件と前年度（47 件）と大きな変化はなかったが、書かれている内容に変化がみられた。例えば、昨年度までは、「デザートを毎日つけてほしい」「カレーがおいしかった」などのコメントが多かったが、今年度は、「今日は、大豆メニューの地場産給食だった。宮城県は北海道の次に大豆を多く作っていることが分かった」や「今日のかみかみサラダを家で作ってみたい。作り方を教えてほしい」といった具体的なコメントに変化していた。

(2) 活動指標（アウトプット）の評価

活動指標（アウトプット）の評価は、学校における食育の取組状況等に対する評価である。これも全体計画の作成時で設定した活動指標にそって行う。評価は、その取り組みに関わった実施者による自己評価だけでなく、第三者の視点も交えて複数で行う方が客観的な評価ができる。具体的な活動指標としては、食育指導実施率、食育指導の継続率、親子給食の回数、食育研修の回数などがある。

各学校等の実情に合わせて、以下の指標の中から必要な項目を選択、加除修正する。又は各学校独自の指標を設定する。学校独自の指標を設定する際には、「宮城県食育推進プラン」や市町村の「食育推進計画」との関連を図りながら設定していくことも考えられる。また、評価の様式や方法等についても、適宜、設定する。

区 分		評 価 指 標	評 価 (特記事項)	
食に関する指導	給食の時間における食に関する指導	給食の時間を活用した食に関する指導が推進され、機能しているか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 栄養教諭と学級担任が連携した指導を計画的に実施できたか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 学級担任による給食の時間における食に関する指導を計画どおり実施できたか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 手洗い、配膳、食事マナーなど日常的な給食指導を継続的に実施できたか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 教科等で取り上げられた食品や学習したことを学校給食を通して確認できたか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 献立を通して、伝統的な食文化や、行事食、食品の産地や栄養的な特徴等を計画的に指導できたか。	1 2 3 4	
	教科等における食に関する指導	教科・特別活動等における食に関する指導が推進され、機能しているか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 栄養教諭が計画どおりに授業参画できたか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 教科等の目標に準じ授業を行い、評価基準により評価できたか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 教科等の学習内容に「食育の視点」を位置付けることができたか。	1 2 3 4	
	個別的な相談指導	偏食、肥満・痩身、食物アレルギー等に関する個別的な相談指導が行われ、機能しているか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 肥満傾向、過度の痩身、偏食傾向等の児童生徒に適切な指導ができたか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 食物アレルギーを有する児童生徒に適切な指導ができたか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 運動部活動などでスポーツをする児童生徒に適切な指導ができたか。	1 2 3 4	
		<input type="checkbox"/> 栄養教諭、学級担任、養護教諭、学校医などが連携を図り、指導ができたか。	1 2 3 4	

区分		評価指標	評価(特記事項)		
給食管理	栄養管理	「学校給食実施基準」を踏まえた給食が提供されているか。	1 2 3 4		
		□「学校給食摂取基準」を踏まえた栄養管理及び栄養指導ができたか。	1 2 3 4		
		□「学校給食摂取基準」及び食品構成等に配慮した献立の作成、献立会議への参画・運営ができたか。	1 2 3 4		
		□食事状況調査、嗜好調査、残食量調査等が実施できたか。	1 2 3 4		
	衛生管理 項目を評価する)	職種に応じて評価可能な	「学校給食衛生管理基準」を踏まえた衛生管理がなされているか。	1 2 3 4	
			□衛生管理を徹底し、食中毒の予防に取り組めたか。	1 2 3 4	
			□調理過程から配膳までの手順や衛生管理を徹底し異物混入を予防できたか。	1 2 3 4	
			□国や学校等の対応方針に基づき、適切な食物アレルギー対応ができたか。	1 2 3 4	
			□検食を適切に実施し、記録を残しているか。	1 2 3 4	
			□保存食を適切に採取・保存し、記録を残しているか。	1 2 3 4	
			□調理及び配食に関する指導は適切に行うことができたか。	1 2 3 4	
			□物資選定委員会等出席や食品購入に関する事務を適切に行うことができたか。	1 2 3 4	
			□産地別使用量の記録や諸帳簿の記入、作成を適切に行うことができたか。	1 2 3 4	
			□施設・設備の維持管理を適切に行うことができたか。	1 2 3 4	
連携・調整	食に関する指導	教師同士の連携体制が構築され、食に関する指導が行われているか。	1 2 3 4		
		□栄養教諭は養護教諭、学級担任等と連携して指導ができたか。	1 2 3 4		
		□栄養教諭を中心として、家庭や地域、生産者等と連携を図った指導ができたか。	1 2 3 4		
	給食管理		栄養教諭と教職員の連携のもと給食管理が行われているか。	1 2 3 4	
			□栄養教諭は学級担任・養護教諭等と連携して栄養管理、衛生管理ができたか。	1 2 3 4	
			□栄養教諭は調理員と連携して給食管理ができたか。	1 2 3 4	
			□栄養教諭を中心として、納入業者や生産者等と連携を図った給食管理ができたか。	1 2 3 4	

【評価】 1：できた 2：おおむねできた 3：あまりできなかった 4：できなかった
 ※学校の実情に応じて段階別評価を行うか否かを検討する。

出典「栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育」（文部科学省 平成29年3月）

(3) 評価の進め方

評価の実施に当たっては、栄養教諭が中心となって、成果指標（アウトカム）により取組の成果を評価し、活動指標（アウトプット）により取組の状況等を評価する。成果指標については、前述の「成果指標（アウトカム）の評価項目例」等を適宜活用して、栄養教諭が関係の教職員と連携を図り状況を把握する。また、活動指標については、前述の「活動指標（アウトプット）の評価項目例」等を適宜活用し、全職員を対象にして、取組状況等を把握する。さらに、食育推進組織においてこれらの結果について整理・分析し、食育の成果と課題を明確にしたものを全教職員が職員会議等で共有する。

3 学校評価との関連

食育の評価を実施する中で把握した食育の成果や課題について教職員が共通理解を図り、「学校評価」を行う際の基礎資料として活用することが可能である。また、「学校評価」の中に「食育」を位置付けることは、食育に対する教職員の認識を高め、保護者や地域との連携を促進するなど、学校における食育の推進につながる。

「学校評価」は学校教育法に基づくもので、教職員が行う「自己評価」、保護者・地域住民などが行う「学校関係者評価」、外部の専門家等が行う「第三者評価」があるが、まずは、「自己評価」（教職員による評価）を基本とし、必要に応じて、「学校関係者評価」や「第三者評価」など保護者、地域の方々、外部の専門家等にも協力を得ながら評価を行う。

なお、学校評価における「自己評価」の結果については、その結果を公表することとなっており、食育の成果等と合わせて、周知・啓発を図ることにより、学校・家庭・地域が連携した取組が推進される。

4 評価（Check）から改善（Act）へ

評価結果を踏まえて、食育推進組織において次年度に向けての改善点を検討する。その際、栄養教諭は、校長（推進組織の委員長）に客観的な評価資料を示し、具体的な改善点を相談した上で、全教職員で共通理解を図る。また、保護者や地域住民などにも適宜評価結果を公表し、相互理解を深め連携体制を改善・強化するとともに、次年度の計画策定に生かす。

評価結果の考察には、どのような取組を実施した結果なのか、という視点が必要になる。そのために、食に関する指導の報告では、評価の結果を示すだけでなく、指導計画と活動内容も示す。指導

計画と活動内容とあわせて評価の結果を読むことで、次年度の指導計画の改善案の提案が可能になるためである。

食に関する指導の報告の際に含む内容 例

I. 指導計画の背景と目標

- ・食に関する指導目標について、学校教育目標や地域の健康・食育計画等の関連性を含めて、説明する。
- ・子供の実態把握の結果から設定した成果指標及び目標値を説明する。
- ・成果指標の達成に向けて設定された活動指標を説明する。

校外に報告書を提出する場合は、学校の概要を最初に示した方が、学校の状況について理解を得やすい。

II. 活動内容

- ・成果指標の目標値の達成に向けて設定した食に関する指導の目標と、行った活動内容を説明する。

活動内容はいつ誰に何を行ったという視点である6W1H（実施時期や時間等（when）、実施者（who）、対象（whom）、実施場所（where）、指導目標（why）、指導内容（what）、教材・学習形態（how））にポイントを置くとまとめやすい。

- ・個々の活動内容の説明には、活動の進行管理状況（経過評価）を含める。

進行管理状況とは・・・活動が予定通り進んだのか状況を把握するもの

例：「〇〇教室」を行った際の参加率（何人に声をかけ、何人が参加したか）がこれに当たる。進行管理状況は、計画の見直し・改善（Act）の情報になる。例えば、参加率が高かったにも関わらず、成果がみられなかった場合は、教室の内容が問題だったのではないかと考察できる。一方で、参加率が低かった場合は、募集方法や教室設定時期など企画自体に問題があったのではないかと考察できる。

III. 評価

- ・Iに示した成果指標の目標値の達成度を結果として示す。
- ・Iに示した活動指標の結果を説明する。

評価の結果に対し、実施者の意見は入れず、表やグラフを活用して、結果を客観的に示す。

IV. 今後の課題

- ・IIIに示した評価の結果について、考察する。
- ・考察を踏まえ、次年度の計画の提案を示す。

数値目標が達成できた場合は、どういう活動が達成につながったのかを考察する。そして、次年度に向けて、目標値を上げるか、あるいは他の目標に変えるかの提案を行う。一方で、達成できなかった場合は、活動指標の評価や活動途中の進行管理状況を含めて、課題がなかったか、改善する点はないかを振り返り、次年度の指導計画に反映させる。

評価の考察を踏まえた指導計画改善の視点

次年度の指導計画に活用する視点として、以下のような視点が考えられる。

〔目標値を達成した場合〕

- ・新たな評価指標に変更する

例：朝食を「毎日食べる」と回答した子供の割合 目標値 85% → 実績値 90%
この結果を受けて、次年度は、「主食・主菜・副菜のそろった朝食を食べる子供の割合」を増やすという目標に変更する（現状値を把握する必要がある）

- ・目標値を上げる

例：朝食を「毎日食べる」と回答した子供の割合 目標値 85% → 実績値 85%
この結果を受けて、次年度は、目標値を90%以上とする

- ・評価指標からはずす

例：朝食を「毎日食べる」と回答した子供の割合 目標値 85% → 実績値 98%
この結果を受けて、次年度の評価指標からはずし、他の評価指標を設定する。ただし、現状維持を確認するため、毎年実態把握は行う。

〔目標値を達成しなかった場合〕

- ・評価指標を変更する

例：食育に「関心がある」と回答した子供の割合 目標値 80% → 実績値 75%
食育に「関心がある」の評価は子供には難しく、食育でも指導の目標にしにくいことから、食に対する意識として、「食事が楽しい」と回答した子供の割合に評価指標を変更する。

- ・目標値を下げる

例：食育に「関心がある」と回答した子供の割合 目標値 100% → 実績値 85%
現状値からは改善されたものの、100%は高い目標であった。次年度の目標値90%に下げる。

※成果指標の目標値を達成しなかった場合は、活動指標の評価とあわせて、全体計画及び各教科等の指導の内容を振り返り、次年度の計画の見直し・改善を行う。